

映画『グリーンブック』の分析に基づく接触仮設の有効性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 武彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6908

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



映画『グリーンブック』の分析に基づく 接触仮説の有効性

伊 東 武 彦

序論

異なる人種や民族集団などの外集団に対する偏見は、異文化コミュニケーションにおける重要なトピックである。共生社会を実現するためには、偏見の低減は避けて通れない課題である。偏見についての研究は、アメリカの社会心理学を中心に行われてきた。その中で「接触仮説」(Allport, 1954)は、外集団との接触によって個人の偏見や排外意識は低減されると主張する。しかし、その後の一連の研究によると、接触が偏見を低減させるためには一定条件を満たしていなければならないという。

接触仮説の有効性は、現実起こった異文化接触事例の分析に基づいて検討されるのが通例である (Pettigrew, 2008)。日本国内の外国人の割合は増加傾向にあるものの、一般的な日本人にとって異なる人種・民族集団との信頼構築を可能にする中・長期に渡る接触を経験することは容易だろうか。欧米諸国の多文化社会に住む人々と異なり、そうした機会が得られる日本人は限定的だろう。欧米諸国と比べて接触仮説に関する実証研究が我が国で少ないことの一因には、こうした環境の違いがあると思われる。そこで、現実起こったものではなく、フィクションにおける異文化接触を分析対象としても接触仮説の有効性を検討できるのではないかと考えた。その手法を用いれば、日本の研究者にとっても接触仮説は取り組みやすいテーマになるのではないか。本研究では、映画に描かれる異文化接触を分析対象とする研究方法を提案し、その可能性を探っていく。

『グリーンブック』(*Green Book*)は、2018年にアメリカで製作された伝記映画で、トニー(白人)とドン(黒人)という異なる人種集団に属する2人の男性の間に生まれた友情を描いた作品である。この映画の評価は分かれるが、Brody (2018)の“*Green Book* offers a vision of racists changing their views, but in a way that doesn't in any way threaten racist prejudices.”(『グリーンブック』は、人種差別主義者がものの見方を変えていく有様を提供してくれるが、人種

差別主義者の偏見に脅威を与えるものではない。)との見解は肯定派と否定派の双方にとって同意可能な評価であると思われる。トニーは、ドンの深い人間性に触れて個人的友情関係を築いたものの、黒人集団に対して持つ偏見を解消するまでには至らなかった。条件が満たされた場合の異文化接触は偏見を低減させるとの接触仮説の視点に立つと、トニーとドンの異文化接触は接触仮説が必要とする条件を満たしていなかったからではないかと考察される。

本研究では映画『グリーンブック』に描かれる異文化接触を分析対象として、接触仮説が必要とする条件の充足状況の分析結果と、トニーが黒人集団に対して持つ偏見の低減のしかたを照合することによって、接触仮説の有効性を検討する。

2 接触仮説

他の集団に対する偏見はその集団に対する正しい情報の欠如が主な原因なので、相手と接触する機会を増やして真の情報を得ることによって偏見は低減する、と考える接触仮説 (contact hypothesis) が Allport (1954) によって提唱された。しかし、単に接触回数が多ければ、もしくは接触期間が長ければ効果をもたらすわけではない。その接触が偏見を低減させるために必要な条件は、①地位の対等性、②共通目的の追求、③人間性への認識、④制度的是認、だとされる。

この仮説提起を受けて、民族的外集団に対する偏見低減をもたらす接触を検証するための膨大な実証研究が生まれた。Pettigrew & Tropp (2006) は多数の研究のメタ分析によって、上記の条件が満たされた集団間接触は偏見の低減に効果があることを確認した。Amir (1969) は、接触した相手がステレオタイプに反する特徴を持っていることが偏見を低減させる前提になると考え、接触仮説が成立するための条件として「反ステレオタイプの情報」が必要だと主張した。また、当初は所属する集団を極力意識しない個人同士の接触が望ましいと考えられたが、Brown & Hewstone (2005) は、相手の所属集団を意識する接触の方が偏見低減の効果が高いことを明らかにした。その相手が所属集団を代表する典型的な人物として認識されなければ、たとえ交流相手との間に友情が成立したとしても例外事例として扱われ、集団への偏見は変化しないからである。そこで彼らは、「典型性」を重視した上で所属集団を越えた親密な交流 (cross-group friendship) を行うことが偏見低減に最も重要な要素である

と考えた。このようにして、接触仮説の必要条件が加えられていった。

3 『グリーンブック』

黒人クラシック・ピアニストのドンと彼の運転手兼ボディガードを務めたイタリア系アメリカ人のトニーが1962年に行ったアメリカ最南部を巡るコンサート・ツアーから着想を得た作品である。第91回アカデミー賞で作品賞、助演男優賞、脚本賞を受賞した。この作品の基本情報は次の通りである。原題：*Green Book*。監督：Peter Farrelly, プロデューサー：Jim Burke 他, 脚本：Nick Vallelonga, Brian Hayes Currie, Peter Farrelly, キャスト：Viggo Mortensen, Mahershala Ali, Linda Cardellini 他, 製作：DreamWorks Pictures 他, 配給：Universal Pictures, 米国公開：2018年11月21日, 日本公開：2019年3月1日。

3.1 時代背景

アメリカ南部諸州では「ジム・クロー法」と呼ばれる黒人の公共施設利用を禁止または制限した法律が存在した。宿泊施設やレストランが黒人の利用を公然と拒否する中、黒人旅行者がそれらを利用する際のトラブル回避のために利用可能施設を紹介した冊子があった。それがグリーンブックと呼ばれた。

3.2 ストーリー

1962年のアメリカ。ニューヨークのナイトクラブで用心棒として働くトニーが主人公。彼は労働者階級のイタリア系アメリカ人で、黒人に対して人種差別主義的な意識を持っている。そのことは、家の修理にやって来た黒人配管工が使用したグラスをそっとゴミ箱に捨てる行為で伝えられる。ナイトクラブは改装工事のため2か月ほど閉鎖されることになり、トニーはその間の仕事としてアメリカ中西部と最南部を回るコンサート・ツアーの運転手兼ボディガードの仕事に応募する。雇い主のクラシック・ピアニストのドンは黒人であることからトニーは複雑な気分であった。ドンはホワイトハウスに招かれて演奏をするほどの高名なピアニストで、カーネギーホールの上級に一人で住んでいた。

採用が決まり、トニーは家族のためにクリスマス・イブまでに自宅に戻ると約束してツアーに出発した。こうして運転席で絶え間なくタバコを吸いながら大声で話すトニーと、上品にコーディネートされた服装を身にまとい後

部座席で読書するドンという正反対の2人のツアーが始まった。

トニーはドンの演奏を聞くとすぐにドンを賞賛し、尊敬の念を抱いた。ツアーの最中、トニーは各所でドンに向けられる差別を体験した。それはトニーが初めて知る黒人差別の実態であり、ドンが差別の中で味あわされた屈辱と憤慨を通して彼は差別の深刻さを知ることになった。

トニーは、手紙の書き出しの‘Dear’を堂々と‘Deer’（鹿）と書いてしまうような男だ。粗野で無教養だが憎めないところがあり、友人や親族に囲まれて暮らしている。彼はドンにフライドチキンを素手で食べること、骨は車の窓から放り投げればよいこと、流行している黒人音楽などを教える。それに対してドンは、トニーに上流階級の洗練したマナーやトニーの妻に対するロマンティックな手紙の書き方を教える。こうした人間的交流を通して、トニーは彼自身のそれまで疑う余地のなかった偏見を克服し、ドンを友人として受け入れていった。

3.3 評価

この作品は2019年のアカデミー賞の3部門でオスカーを獲得した以外にも高い評価を受け、Rotten Tomatoesでは映画批評家から78%、視聴者から91%の支持を得た。またMetacriticでは、52人の批評家により、69点（100点中）のスコアを獲得した。

この作品に対する好意的批評に共通するのは、トニーとドンが8週間のコンサート・ツアーの間に結んだ友情に焦点を当て、それを‘heartwarming’と‘friendship’のキーワードで描いていることだ。

“Green Book” is truly heartwarming because it is a testament to the power of friendship to override deep-rooted prejudices, a message sorely needed in divisive times.¹（『グリーンブック』は根深い偏見を打ち破る友情の力の証であり、分断の時代に切実に必要とされるメッセージであり、真に心温まるものだ。）

Their friendship transcends the cultural misconceptions that existed in the past which, sadly, still haunt us to this day. “Green Book” bridges a divide by offering hope and proving that we’re not that different from one another²（彼らの友情は過去に存在した文化的誤解を超越するが、悲しいことにそれは現在私たちを悩ま

せている。『グリーンブック』は、希望を提供することによって、そして私たちはお互いにそれほど異なっていないことを証明することによって溝を埋める。)

The focus on the pair's relationship provides a lot of the film's charm. Mortensen and Ali play off each other exceptionally well. The two have a wonderful chemistry, and the film finds many laughs from the juxtaposition of Vallelonga's crudeness and Shirley's uptight demeanour. The friendship that develops throughout the course of the film is genuinely touching. We see Vallelonga's growth as he learns to cast aside his racial prejudices and becomes closer to Shirley. And we see Shirley begin to let go of his uptight attitude and learn to embrace the simpler charms that Vallelonga represents.³

(2人の関係に焦点を当てることによって、この映画は多くの魅力をもたらしてくれる。MortensenとAliは極めてうまく演技している。この2人の相性は素晴らしく、この映画はVallelonga(トニー)の粗雑さとShirley(ドン)の緊張した振舞いを並置することによって多くの笑いを生みだしている。映画の中で成長する友情は本当に感動的だ。Vallelongaが人種の偏見を捨て去ることを学びShirleyに近づく時に、我々は彼の成長を見る。そして私たちはShirleyが緊張した態度を捨て始め、Vallelongaが表現する単純な魅力を受け入れるように変わっていくところを見るのだ。)

その一方で、厳しい評価も受けている。それらは主に、この作品には黒人差別のリアリティが反映されていないとの批判である。The Root⁴は、この作品は“a racial reconciliation fantasy written for white people”(白人のために書かれた人種差別和解のファンタジー)だと酷評し、描かれた内容はドンの遺族にとっては“a symphony of lies”(嘘の交響曲)であると伝えた。また、この作品は現代的問題を描いていないとの批判もある。世論調査によると、アフリカ系米国人の80%以上が、トランプ米大統領は人種差別主義者で人種差別問題を悪化させたと判断している⁵という。アメリカ国内の民族的対立はこうした状況下で深まっており、白人と黒人が旅の過程で友情を結んだとするこのストーリーは多くのアメリカ人にとって受け入れ難い美談だと批判する。さらに、この映画はハリウッド映画伝統の“white savior(白人の救世主)”の定型化した表現を繰り返しているとの批判⁶もある。“white savior”とは、非白人の個人またはグループを抑圧的な支配者から救出するために、あるい

は道徳的に救うために戦う白人主人公のことで、「非白人は無力なので残酷な運命から彼らを救うために輝く鎧を着た騎士（白人）が必要だ」とのメッセージを秘めている。このように、差別の現実を重視する観点からは批判的評価が多い。

『グリーンブック』は、立場によって大きく評価が分かれる作品である。しかし、本作品の主題は異文化接触による偏見の低減であり、それは様々なエピソードを通じて表現され、その中でトニーとドン心理も克明に描写されている。こうした点で、本作品は接触仮説の有効性を検討するための最適な対象であると判断される。

4 『グリーンブック』の分析

映画『グリーンブック』に描かれる白人トニーと黒人ドンとの異文化接触を分析対象として、接触仮説が必要とする6条件の充足状況の分析結果と、白人トニーが黒人集団に対して持つ偏見はどの程度低減したかを照合することによって、接触仮説の有効性を検討する。

4.1 6条件の充足分析

2章で述べた通り、接触仮説が効果を発揮するための条件は以下の6点にまとめられる（Allport 1954, Amir 1969, Brown & Hewstone 2005）。

(1)地位の対等性

接触する人間同士が対等の関係であること。

(2)共通目標の追求

競争関係ではなく、共通の目標を追求する協力的関係にあること。

(3)人間性への認識

人間性の認識を促す接触であること。

(4)制度的支持

権威ある者が、接触を肯定的なものであると認めていること。

(5)反ステレオタイプの情報

接触する相手がステレオタイプに反する特徴を持つこと。

(6)典型性

接触する相手がそのグループの例外的存在ではないと認識されること。

条件ごとにトニーとドンの異文化接触を分析した結果、4つの条件は満たされたが、2つの条件は満たされなかった。分析の詳細を以下に示す。なお、満たされた場合は○、満たされなかった場合は×を【 】内に示す。

(1)地位の対等性（接触する人間同士が対等の関係であること）【○】

トニーの雇い主はドンである。この点では2人は主従関係にある。しかし、トニーは当初この話にあまり乗り気ではなかったが、彼の物怖じしない性格に惚れ込んだのはドンの方である。トニーは自分の要求を認めさせて契約を結んだ。コンサート・ツアーの道中で、ドンは何度かトラブルに巻き込まれるが、そのたびに救出してくれるのはトニーであり、彼に対する必要感が増していく。トニーは道中で会った友人から他の職を斡旋されそうになるが、ドンはそれを引き止める。ドンにとってトニーとは他との交換がきかない存在なのだ。ツアーの日程が進むにつれてトニーは契約時のドライバーの役割を越えてドンの精神的な拠り所となっていく、2人の対等性は高まっていった。

(2)共通目標の追求（競争関係ではなく、共通の目標を追求する協力的関係にあること）【○】

共通目標は、8週間のコンサート・ツアーの計画を遂行してクリスマス・イブにニューヨークに戻ることにあった。その目標達成のために2人は協力する。警察の留置場に入れられたドンを釈放させるためなら、トニーは警官の買収すら躊躇しない。ドンは演奏会場で、屋内のトイレは白人用なので屋外の粗末なトイレを使うように指示されるなど繰り返し非人間的な扱いを受けたが、ドンはそれに耐えた。ニューヨークへの帰途、トニーは睡魔に襲われる。クリスマス・イブの帰宅は不可能に思われたが、かろうじてディナーに間に合うように到着した車を運転していたのはドンであった。立場を超えた協力によって、共通目標は追及された。

(3)人間性への認識（人間性の認識を促す接触であること）【○】

友人や親族に囲まれて世俗的な生活を送るトニーとは対照的に、ドンは孤高な芸術家として精神性を追求する人物である。ドンは単なる成功したピアニストではなく、“But when I walk off that stage I go right back to being

another nigger to them — because that is their true culture. And I suffer that slight alone, because I'm not accepted by my own people, because I'm not like them either! So if I'm not black enough, and I'm not white enough, and I'm not man enough, what am I?!” (しかしステージから降りた私は、白人にとってはひとりのニガーに過ぎない。それが白人の本当の文化だ。その蔑視を私はひとりで耐える。自分は黒人にも受け入れられない。自分は彼らとは違うから。黒人でも白人でもなく男でも女でもないとしたら、私は何なんだ)と、葛藤を内部に抱えている人間だ。トニーは有名なピアニストであるドンの中に秘められた悩みの深さを知っていく。

トニーは、黒人差別が激しい最南部をドンはなぜあえてツアーの場所を選んだのかとの疑問を持つ。北部なら安全でしかも3倍の収入が得られるにもかかわらず彼が最南部を選んだのは、数年前に有名黒人歌手がそこでの公演の際に暴行を受けたことがあったからだ。そんなにひどい差別の地で堂々と演奏することに意味があるとドンは考えたのだ。バンド・メンバーから“Because there is no genius without courage.” (勇気を持たない者は天才ではない)とのドンの信念が明らかにされる。ツアー中のドンの様々な言動は彼の高い精神性に基づいていることをトニーは知った。

(4)制度的支持 (権威ある者が、接触を肯定的なものであると認めていること)

【×】

テネシー州メンフィスのホテルのエントランスでトニーは偶然にもニューヨークの仲間たちに遭遇する。その仲間たちはイタリア系で、会話内容をドンに知られないようにイタリア語でトニーに語りかける。仲間は、ドンを“eggplant” (ナス) という蔑称で表現し、トニーがドンと行動を共にすることに否定的な態度を示す。また、夜間走行中のトニーに背後からパトカーが停止を求める。警官は白人トニーが後部に座る黒人ドンのドライバーを務めることを不自然に思い、トニーのルーツを尋ねる。トニーがイタリア系だと知ると、警官は“You're half a nigger yourself.” (おまえは半分ニガーだからだな)と侮蔑的な言葉を投げつける。このようにトニーとドンの接触は彼の仲間あるいは権威ある者から支持されない。むしろ、ツアーを通じて否定的メッセージを受け続ける。

- (5)反ステレオタイプ的情報（接触する相手がステレオタイプに反する特徴を持つこと）【○】

無教養と粗野のイメージが黒人に対するステレオタイプだとするならば、ドンは無教養と粗野のイメージを多くの場面で伝えている。音楽や心理学などで博士号を持ち、ロシアへの留学後は、著名なクラシック・ピアニストとして活躍し、ロシア語やイタリア語を自在に操り、知的で上品な言葉遣いを好んでトニーの無教養さがにじみ出る言葉遣い（intonation, inflection, choice of words）を直すことを求める。また、トニーが妻に書く粗野な手紙については、“Try to say it in a manner that no one has ever said it. And without profanity.”（誰も言ったことがない表現をしてみなさい、汚い言葉を使わずに）と華麗な文章を書くアドバイスを。さらに、衛生面を心配して素手でフライドチキンを食べることを嫌がる。これらは、ことごとく黒人のステレオタイプに反する情報だ。

- (6)典型性（接触する相手がそのグループの例外的存在ではないと認識されること）【×】

ドンは一般的黒人とはかけ離れた存在だ。トニーがそれを最初に感じたのはトニーの演奏を聞いた時だ。彼は妻に宛てた手紙に“He doesn't play like a colored guy. He plays like Liberace⁷ but better.”（彼は黒人のようには弾かない。リベラーチェのように、でももっとうまく弾く）と書いた。ドンは、ラジオから流れる黒人ミュージシャン（リトル・リチャード、チャビー・チェッカー、アレサ・フランクリン、サム・クック）についての知識をほとんど持たない。意外に感じたトニーは、“These are your people!”（あんたの仲間だろ）と言うが、ドンは同意しない。また、“I've never had fried chicken in my life.”（フライドチキンは一度も食べたことがない）と言うドンに対してトニーは“You people love the fried chicken.”（君たち黒人の好物だろ）と決めつける。それに対するドンの答えは、“You have a very narrow assessment of me.”（君は私に対してとても狭い見方をするんだな）であった。ドンは黒人の中では例外的存在すなわち非典型であり、トニーはそのことを次第に認識していった。

これ以外にも、ドンが非典型的存在であることを象徴的に示す場面がある。車がオーバーヒートして停止し、トニーがエンジンルームを開けてラジエーターに給水している間、ドンは車外に出てあたりを見渡した。彼の視線の

先では、一群の黒人たちが農作業をしている。両者は黒人でありながら、その間には大きな隔たりが存在する。高級スーツを着て白人運転手を従えるドン、粗末な労働着を着て苦役に従事するかのように畑を耕す農民たち。無言のまま、両者はしばらくの間見つめ合っていた。

4.2 トニーが黒人集団に対して持つ偏見

コンサート・ツアー中に生じたトニーとドンの異文化接触は2人の間に友情を育んだ。ドンに対するトニーの態度は当初から一変し、彼の黒人に対する偏見は解消したかのように見える。クリスマス・イブのディナーで彼の仲間がドンを‘nigger’と呼ぶことを制するトニーは、ツアーに出かける前とは別人だ。しかし、トニーが人間的親しみを感じて友情を築いた相手はドン個人であって、他の黒人に対してではない。この作品は、トニーの黒人集団に対する偏見が解消もしくは低減した様子は描かれなまま終わりを迎える。

4.3 接触仮説の有効性

6条件の充足についての分析結果と、トニーが黒人集団に対して持つ偏見の低減を照合する。トニーとドンの異文化接触は、接触が効果をもたらすために必要だとされる6条件の(4)と(6)を満たさなかった。その結果、トニーの黒人に対する偏見の低減も限定的なままに終わった。すなわちこの異文化接触は、「接触仮説の条件が満たされない場合は外集団に対する偏見を低減させない」ことを示している。これは、条件が満たされた場合の接触は偏見を低減すると主張する接触仮説の有効性を逆説的ながら支持する結果である。

結論

映画『グリーンブック』に描かれる白人トニーと黒人ドンとの異文化接触を分析対象として、接触仮説が必要とする6条件の充足状況の分析結果と、トニーが黒人集団に対して持つ偏見はどの程度低減したかを照合した結果、接触仮説の有効性は逆説的ながら支持された。なお、この結果は前述したBrody (2018)の“*Green Book* offers a vision of racists changing their views, but in a way that doesn't in any way threaten racist prejudices.”との見解通りだとも言えよう。

本研究では映画に描かれる異文化接触を分析対象とする研究方法を提案

し、その可能性を追求した。今後は同様の方法を用いて、6条件を満たした異文化接触が偏見を低減させる事例を提示することによって、接触仮説の有効性の確認が求められる。また、異文化コミュニケーション研究において、フィクションの分析は現実の異文化接触と同様に成立するのか、さらに、異文化コミュニケーション教育において接触仮説の条件を満たす映画は学習者自身の偏見を低減する疑似体験として機能するかなど、この領域における映画の可能性を追求していきたい。

注

1. Daily Trojan, November 27, 2018. (<http://dailytrojan.com/2018/11/27/review-green-book-tells-self-aware-heartwarming-tale-of-friendship/>)
2. Your Observer.com, Monday, November. 26, 2018. (<https://www.yourobservers.com/article/peter-farrelly-green-book-movie-review-sarasota>)
3. Into the Void, December 7, 2018. (<https://intothevoidmagazine.com/2018/12/07/in-green-book-the-beauty-of-friendship-replaces-racism/>)
4. The Root Com, 1919. 2. 26. (<https://thegrapevine.theroot.com/shirley-you-must-be-playing-green-book-writer-says-he-1832898380>)
5. CNN com, January 17, 2020. (<https://edition.cnn.com/2020/01/17/politics/black-voters-trump-poll/index.html>)
6. BBC Com, 25 February 2019. (<https://www.bbc.com/news/entertainment-arts-47355634>)
7. アメリカの白人ピアニスト, エンターテイナー。1919年生まれで1987年没。高い演奏技術とショーマンシップで評判を博し、「世界が恋したピアニスト」と呼ばれた。

参考文献

- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wisley. (オルポート, G.W. 原谷達夫・野村昭 (翻訳) (1968). 『偏見の心理』東京: 培風館)
- Amir, Y. (1969). Contact hypothesis in ethnic relations. *Psychological Bulletin*, 7 71, 319-342.
- Brody, R., (2018). “Green Book,” Reviewed: Peter Farrelly’s Bland, Regressive Flip on “Driving Miss Daisy” *newyorker.com* November 17, 2018 <https://www.newyorker.com/culture/the-front-row/green-book-reviewed-peter-farrellys-bland-regressive-flip-on-driving-miss-daisy>
- Brown, R., & Hewstone, M. (2005). An integrative theory of intergroup contact.

- Advances in Experimental Social Psychology, 37, 255-331.
- Pettigrew, T.F. & Tropp, L.R. (2006). A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90(5), 751-783.
- Pettigrew, T. F. (2008). Future directions for intergroup contact theory and research. *International Journal of Intercultural Relations*, 32, 187-199.
- Tausch, N., & Hewstone, M. (2010). Intergroup contact and prejudice. In J. F. Dovidio, M. Hewstone, P. Glick, & V. M. Esses (Eds.), *Handbook of prejudice, stereotyping, and discrimination*. 544-560. Thousand Oaks, CA: Sage.